俄羅斯紀聞別編　六

早稻田大學附屬
圖書館
第　寄　小田氏寄托
654
第　2
第　冊　3
外帯不許出
ル8
2994
36

俄羅斯紀聞別編

第一冊

戊戌夢物語

夢夢物語

危言

雰情問答

海防論

戊戌夢物語

冬の夜北海吹て人情淋しく雪ハ霏々と積りて簷に
つたひ戸に敲く風の音すさましくいと物すこきに物思ひ
すゝみなきに眠りもやらて獨机に倚り燈火かゝけて書籍
讀けるに夜ハいたく深たれハいつしかに目も疲れ氣も倦て夢
ともなく幻ともなく恍惚たりけり或る方へ招かれて座そ
中を入見れハ碩学鴻儒と覚しき人々數十人集會
合し此物語し侍り其中に甲ノ人乙ノ人に向て言けるハ
近来珍敷承りしハイキリス國のモリソンと云へる者

ル 97
3038
36

特 ル 8
2994
36

取て船を仕出し日本漂流人七人を去ル亥年江戸を海上ニ於て
送り来れとも併として交易を願ふ中帰帆なさしめたり
抑も此イキリスといふ國ハいかなる國にや此乙ノ人差けるハイキリスと
申國にて和蘭陀の北に当る島にてヲランダの王都アムステルダムと
申処より海上百十八里斗り隔り一州風の時ハ一昼夜程にて
船を出す用路容易く國甚大きに日本の様に有しかとも狭く
其國四方人数ハ日本よりハ少きとも相拵して人口一千七百
七十万六千七人よりも國人敏捷諸事ニ勉強して傍ら之を
好んで文学を勤め工技を研究し武術を練磨し民を

富し國を強くすることを務むと傳ふれとも實海浅瀬暗礁多く
外寇の難くなし近来エウロッパ大乱の時ニ當りてイキリス独立
して國民千才の兵を免れ〆國都ロンドンと申処に至て繁昌
の處ニて街坊其数人戸稠密ニて人口凡百万人斗りも居る由
其運の都合宜る如くして専ら諸方と交易をいたし諸國
航海仕不毛を開き人民をも蕃殖し事人を移導して土地を拓
辰仕出しに至りて外國領分の人数ハ七千四百万人四万人て
中にも本國北隣ニ有リ中にも大國の属ハ一ハ北アメリカニて
過ぎアメリカの西隅より東ニ二ヶ所ニ限り是か南へ分けて天竺の南西ニ

其処を四ハ新和蘭陀と云る 日本の極南十度より内に在り
五ハ南アメリカとしてブラジリヤ国ノ名ゴーアナ ポルカルホルニア亜墨
ヲ日本の東十五度ヨリ西ニ當る 六ハ天竺の内モゴル抔云国の
内を雲南暹羅の南 南天竺の地に當る 七ハ東天竺辺にて
日本近海南洋の諸島を名つけ 南の島々は當る所也
の国々を大いに諸侯を置いて支那の地へ近き者共の二等
に舟を軍艦とて一艘ニ石火矢四五十門を備へ又を造り置き
に當世海の数二万五千四百六十四艘にて右中に住舟ハ要
上役人ハ都合十七万八千六百五十人 下役人ハ四十万五千人 水夫

其外奴僕ハ無極百万人程に至り 誠に広大
なる事にて右中にも大坂自然 航海の術に至りて水軍の勢の
盛んなる外国もあり 第一廣大なる交易のことを致して旺盛に
末永く凡そ五大洲中此様の事にして諸国の者を乱さず
否れ中にも東海支那を相手にて交易する廣東の例に
比して南部を亜細亜右の諸下役人廣大にて
更に南海諸島ニアメリカの産物を集め数十艘を積廻し廣東に
輸送致し更に茶を交易し右を本国へ送りし事にて此等の
イギリスハ雲南暹羅辺を領して処々支那の属国を界を接して 適氏

擾乱仕界を越へ争闘争し擾戮仕候ヲ時ニ至り候支那人
イキリスを跡ニいたし加ル加ルホルトカル即日本の南蛮と唱候の和蘭陀人共も広東へ
日頃ハ交易仕候処イキリスの交易盛ニ相成候ニ付自然各自己の
衰微ニも相成候色々讒言を構へ様々誹謗仕候ニ付右ホルトカ
ル和蘭陀ハ清朝革命の砌大功も有之夫ハ広東ニ地面を貸り
而已ならず親愛を受候との儀ニ付右讒言を信し尚イキリスを
除キ交易相成候仕方もこれ無く乾隆年中の末ニ至り一の
掃除候ニ付永年交易方差引の節有之候ニ仍て相互ニ是迄も色々
評議を致し候ニ付広東交易の儀ニ付ては先年来往復も有之候ハ

且近年イキリスも革命ニ而当所仕人ニ而国々欲合支那ニ交
易之体ニ相成候ニ付右欠乏いたし人々迷惑ニ及ひ又イキリス領南
海諸島を始め及ひアメリカ辺等も多く有之候ニ付支那広
ニ遣ハし右ニ而以上一旦ハ右等ニ而仝様ニハ迚も是迄は
有之候交易之体ニ而ハ迚も難相成候ニ付交易之儀ハ広東ニ而
交易方ニ而取扱ひ候ニ付広東ニ而役人の所為ニ而全く支那帝の
意ニハ無之候ニ付右ニ付ては頃嘉慶帝誕生有之候ニ付右
追々差賀し貢物を以京へ差上候ニ付使節をも遣し候
帝ハ租税所仕候ニ付以近年ニ決し候ニ付人物を撰ミロル

ドールカテ子イと申者ニ撰ニ而使ニ仕天文地理医術ニ
唐ハ支那ニハ未熟の事ニ付右之通様上達仕候者を択み日本ニ仕
右之国語仕候書籍十三論語諸器械并上之一切ニ教ニ而支那
通譯の者ニ而も相撰ミ正使副使の外各壹艘宛船中ニ而郁
合四艘ニ而本国を出し……郎リ并錨并交易と指図
王の……ニ而由ニ而……ニ而廣東交易の様子
ニ本国の近年……廣東ニ而西洋諸国之商館中イキリ
ス鮫右臣大ニ而申候甲ノ人文……日くモリソンと申者八名の
学へ……乙ノ人曰く……及ひ……

ニ年イキリスニて頃学究の者を学校ニ教授ニ撰挙候五
六千石ニ而申候……イキリスの支那ニ……昇蔑
せられ……全く言語文字ニ通し候事之の係と有之
ニ通し……廣東……
廣ニ五車韻府ニ而イキリス語ニ翻訳いたし出版仕漢字出精仕
佳来ニ文章ニ書候ニ付近来ニて八金……吏の總督と
ニ而……南海中の……軍艦一切支配仕候……水軍武
三万位之……
位の……甲ノ人又日く……人の……和

○者ニ在……官
位を進ミ職……
用ゐ……廣東交
易

蘭陀人ニ許し候ハ、其上ニ於て給候義ニ付イキリスも和蘭
陀国の儀ニ而、元来同様之事情ニ候処、先年佐嘉の迴船イキリ
ス領の天竺ニ而漂流致候節、イキリス人此者を和蘭陀へ相渡し
候得共、其節ハ彼方之以書無之候、白国の次第を申上、又右漂流人送
還之儀ニ付、相頼候得共、是迄ニ而、右人送返し候処、右之節ニ献上の
モトリソン船ニ御座候節、差遣候事一向承知不仕候、見究て
候処、右者ハ日本ニ而人ヲ日本ニ來り候処ニ而深く其子細を有
之候処、イキリス人ニ面会致し、其上ニ而能く承り候処、情懐
知仕候ニ付、則異見を以て信義を立て幾十年来も相頼候、又

日本人之交易を願候趣ニ而、此度せめてハ海上通船ニ而薪水缺
乏し候節も右のとも願候程之風説仕候様ニ付、是又云ル文字
も通し申候、且其節名乗も無之候、イキリスと唱候儀、海賊と
のミ思ひ候迄合ニ無之候、右船国地へ近寄候ニ付、有之候得ハ
右も無之、鉄砲又ハ大砲ニ而打掃ニ相成候ハ、世界中ニ而何れも
扱無之、才々何となく是ハ英人ハ船利の為ニ参り候イキリスを海賊と
のミ被奏仕候儀、心得の儀ニ相成候、漢文自得仕候者ニ命し
為其其上ニて右之訳巨細ニ訴訟申上候へども、又其其
御沙汰無之候へハ、漂流人送り候と名目を仕候様ニ而又承

以華人ハ偽言仕候テ考ヘ候処通事内江戸通商ノ船ニ寄候若ハ
即モリソン船ト申候モ為セ申ト右ル内手捕ヲ為シ候者急ノ外
無之候ニ付テ我ク又長崎ヘ不罷越直ニ江戸近海ヘ寄セ候段
八九年中ヨリ乾隆ノ末年ニ貢船ノ御貢物操ノ外ニ無之ニ広東ノ
陸路運送相成候所ニ小来近海ヘ舟ヲ寄セ候段広東
諸附役人ヲ猥ニ通リ申サズ右役人ノ乗リ出訴訟仕候ニ付キ一
被の仕組ニ長崎ニ相成ハ英人ノ取扱ヒ不足之奏ヲ願ヒ通ヘ候急
又考ヘ甲ノ人曰ク 蘭 御代ノ初ニ台湾ニ交易セ和蘭陀ノ之ヲ一
他ナル恐ヒ無之陸地ノ陸路通テ遣セ交易ニ免シ候恩ニ

若シ此免自ら近付候テ勇猛ニ出会ヒ手捕ニ致シ手ニ取定メ置キ候ハ
猥ニ出候テ手捕ニ致シ候乙ノ人曰ク西洋諸国ニテハ敵ノ外
人民ヲ害シ降伏人命ヲ救ヒ候ハ何ノ功徳ニ候ヤ今既ニ先年
デンマルカト申国ヲイキリス兵戦シ初イキリス水軍デンマルカノ
都コーペンハーガト申処ニ押寄セ命日部隊衛ノ備甚堅ク
イキリス人大ニ敗北仕ニ至リ一軍艦石火矢ニ為ニ大ニ破損仕既ニ
覆没溺死ニ臨ミ候処イキリス人多ク一艘汁舟出シ船出シテ
デンマルカ人数十人捕ヘ其者共ヲ舟ニ乗セ船時砲撃見合セ
乗移リ入リ候処デンマルカ王之レヲ取リ謀計ヲ為シ構ヘ一軍

艦を救ふ事速なれハ全く勝利となる事もなく若又其人を
あやまち自国の者船中に有しならハ骨肉を傷ふに似たるにあらすや
然して又今石火矢人を救ふ事ありしハイキリス人軍艦を結ひ逃去るもあれ
此事は右等の振合にて考見れハ西洋も凡俗ハたとへ敵船たりとも
自国の者千万人有しなれハ漫りに放砲に使ふることを得さるへし
イキリスハ日本へ対し敵国ならす謂ハ仲合も悪しく他人にあらす
今彼漂流人を憐み仁義を示し無く送り来りしものを彼
事も元今日迄日本へ懇に来るとも日本ハ其民を憐ふ仁し
国とも若又万一不仁不義を債りけれハ日本海辺にイキリス渡海

戦争を好み仮令一時は勝利を得ると雖も其上の寇となる事して遠
の邪にハ至るものも雖手あらす自然国家の大患となる事
これのたとへ大おしても是非右等の事へ理非も分り
不申暴国をも存義の事を申解し礼義正しく名を失ひ候
分めにて事の害猶生するも難ハ或ハ文武イキリスと既
事得ニ若付りて国内衰弱仕候様に相成候ては御国家
の御武威を損し候事もいかに残念のミならす甲人
日く然らハ如何にして是非とも上ハ御政治の御国の
あらさる事ハ如何にて御政治の恵のみ一凡ての事に

云々人曰く云ヘルハ国家の政治ニ係る中ニ無味の賤民抔の口上ニも
取るへき事あれハ芻蕘の言も採るへしとある古言もあれハ
此事ハ兎角も無稽なる上ニ先ツ今イキリス人の底意を察ニ彼ハ
彼仁義を唱へ漂流人を送来れハ江戸近海ニ出る要害の地
を着岸之節見定ニ候故なる漂流人を送届候趣ニ而探し
して厚く應接ニ然る時ハ其ニ至り先年一旦拒み候ハ前ニ和蘭
陀人とも外国の耳目を官ニ仰付られ候故彼等ハ支那韃靼天竺も
他邦ニ通商仕候方も結ニ中々得意なる場所那ニ候と手強き
にも救引し利害を論し又ハ近年進むる事ニ候へは支那朝鮮魯

西亜其外諸国通商の国の動静日本ハ関係いたし候事ニ出
此候ハ一方ニハ大功有之候共一方ニハ大害有之候事ニ候他ニ
彼ゟ寄事ハ即ち有之候上ハ大事ニも決する事に至る事ニ候而
候ニ今度イキリス人参越候て来年の時節ニ何分清
朝鮮等ニ魯西亜其外近国の事情事等ニ絡付候て彼之近状
一座の功を立候て交易を取定候様ニ相成候ハヽ宜しき的害
詳細ニ言上の仕方ニて仕して其ニ外国の事情ニ通達致し候情を
詳らかにせしめて蘇武張騫と称せられし如く取扱ひし
国家ニ於て大幸ニ存し候而して彼ゟ取扱ひ候一旦ハ此方ニ而拒む

皆相交易ニ至リ然ルニ是ヘ入国和合ノ親睦ノ外ニ厳重ニ修復
断然ト制禁ト相立候ニ付テ我ニ於テ仁義ノ名ヲ失ヒ候ハ彼ニ
於テモ又必ス以テ深ク恨ミ憤リモ仕ルベキ事ニ候得ハ既ニ本邦
ニテモ既ニ文化年中魯西亜使節レサノフ日本ヘ来航シテ交易
願ヒ不叶事ヲ恨ミ漂流人ヲ送リ候所其事ヲ歎キ自殺仕候者モ有之下役人
ホーレントウ之レヲ恨ミ憤リ其後我船ノ船頭ニテ蝦夷ノ掠奪ヲモ
生シ或ハ英吉利ノ如キハ先年モ伐去ノモリソンハ近ク廣東
ニ在リテ士軍艦許多ヲ所持致シテ日本近海ニ廻リ来ル由
魯西亜レサノフノ比モ之ヲ取法ノ所ヲ救ヒ有之ラレ候事ニ御座候

共ニ宜シク御座候ニ付甚タ慕ヒ候ハ海外ニ漂流人ヲ唱ヘ候者
舟方水主ノ者ニテ候得共シ文字モ無之才モ無之者ニ候ヘ共
詳ニ御承知之モリソンノ如キハ尋常ノ者ニハ無之候
但右ハ上ノ役モ有之今文明ノ時代明君賢相上ニ在リ
策ヲ立ル後ハ中華ニ於テモ至尊ノ我倫理ニ於テモ千載ニ
渡リ以テ西洋ノ政治ヲ論シ候テ我国ニ軽シテ
出候テ仁ヲ蒙リ候中華ヨリモ尤モ是ハ国ト思フ
大患候ニ出ノ事夜深ク御咎メ未タ無之ニ付キ之ヲ申上候
木拵ノ声ニ驚キ夢覚テ見レハ今迄集会シ席ニ思ヒ

しは我寝室にて我に討ける人もなく燈の影いと暗く鶏の
声遠く聞へ夢もちや此あんとまり夢なりけん思ひ居たるに
も醒るに似て又覚るにもあらず夢に似て夢にもあらず誠に不思
議の事なりし故に筆を採りて覚へしことを記し置
戊戌冬十月廿八日の望

夢之物語

春之海のどかに雪ふ降しきて雅なる人々なりき
先北之人にてまた夢蓬先生号之酒を好みて久しく けふまでと
今宵も又一盃を吞んとするに一寸さはい 晴れ城の雪
の朝ぞ待たるる春の明月北村の筆写し たる事
業工拝して此後二合もちたん 始ら五ツ時来る 稿居
らとたえし後に寝に仮け給ひ北斗に帰所せし夢を付
は夢のうち人々夢物語てふ冊子を記しおきぬ 同
き折の思ひ出北方本居五年 坂本なにがし書也

今朝本多居士の許ニて或日右の夢物語の事を
議論せしけるに先生ニハ何事か有けん人の是を
いふ事ハ無き事ハ更に知らず天魔(ジヤマ)
論を好む人或ハ定て邪魔者流を何れ人と思ひ候か
あらば今尋ねて所存を披露致しみ度ハ存じ
候由其ハ古より外莫利宗法それハ先生此人面白く
日く右の莫利宗法ハ古より已来世にも云はすしたる
事なり哉彼様の者ハ此人ハ諸田今為て即当
京にて此人[illegible]莫利宗一件何れ[illegible]ハ

西洋の事なれハ此人ハ右の夢物語此論を以て
思ひ出しや先生此説を承り候ひけるハ此人
答て曰諸子皆々物語若し人ハ此莫利宗ハ[illegible]
はつれ傑此人て[illegible]れて聞く事と[illegible]此事と[illegible]
知らぬハ下々莫利宗支那此事を存て[illegible]
も書ゑに[illegible]事[illegible]何程日本人ハ模様
あるまじく琉球朝鮮日本の此九州奥州此事
を知る者あり中華諸厄利亜偏国の人の数年此数
まても詳ならざるハ諸厄利亜此事[illegible]す
五

大洲の事なとも備へて密なりきて何か只人とおこたらず
加様なる豪傑なる人の考へ出せし論なれハ一ヶ道理也故に
今世の時宜にかなひたる事共也猶々是ハ日本開闢
以来に至る二百五十年風俗と勤加姓清是等共
以前ハ武国と称する日本中皆四海一統或偉良人
行る国ゆへ此時等なれハこそ也莫利宗秘て伐打拂
ひなし只今猶是等清太極ハ何か一通原
然に海濱此地に莫利宗事なき大に法り東海に而なる原
国なり返事されハさらに見て太平也事なれハ何か

其此物語此流の古本ハ清も来るる板行あらすなし見込
扨またハ此様な夢のと思ひ居る所清国又西洋の人
の書き著せし論なれハ宜しく紙員のこみとこなす
しかし決して扇堂なる人の同而に倚り此篇なとも只ハ深
かけまく伐打拂ふ事と何らん倚りかけ是ハともかくや
大変此事を知る無事是流と知る人なり是ハ大此度物語
ハ読みて十枚計り此紙を読み是と数寄此軍者数寄此大
蛇なとも繕ひ好む大切なる事と是此日本書に記して浮世此
事に関わる也此人なとも知るまて清太平の恩沢に

溶しなる漂釋して二命を救ひ渡海を為さしむ送致
おいて其捕へ此船を来る事を是とし其謀ある事をなく
なき事なり是非を言ふは愚の中に在り人々の表ある事なり
其の如く取る論を為す事は蘇武張騫
等の者共しかして其異国の情実を知る様に
以漂流の難を受けし莫利宋を往し此上ある謀
べき之者は先生にも只今に至る事論をしめ其方
ある者に我か此考にも殊なる所の人も共に
あり其所にも申して此論ずる事情申し置く

は其所に候其故に来ても回謀は此人達は其
事なるの其者に此論を申す人にて此人のしなる事
其候は日本人に甚だしく帳は其等の此の莫利宋此
来る事は師の言ふ事に其抜には何と申す年を以て
大賊と言ふ事を申すは其流の言ふ事を其莫
利宋は江戸に於て二三十二人をボンソと申す趣を拾ひ
あしく様に申す事を日本国中の者を諸同醒
しても是なる之勿論夢物語の此説を申す人も此事を事の
其等を申して何とか申す事をならば御

ボンく成す拝借しむると云ふ是人に唐紅人に云才
万事に知らしく其版行さ出して彼の言を交易を始むけ
而して内に居る金を交易を為して一生涯外国へ海岸に於
熟一本水一滴とも事を為すとも決して其利害を
主張して切角経て数多の法律を定めて日本人の諸達し
いわゆる日本海岸に於ては諸国の船の見え次第大砲
を打掛けて其船を撃沈すべきは交易を許し難しと申したるは
の無益なる我等に於て何故にかく許さんや某は
東海に独立国ありと雖も一銭銀路の交易の

論するに如かず此等の事と雖も其た方は空
此事ならず其私は更なり其には法令排士たる者
ては則ち諸国外に出ずる其国々の為に情を深く日本
は清法中の如く其様のままに此様の関の外の極秘
唐の如く交易の物を其外に来着する者の弱きを武備に
衷人の海中の眼に法令からは万事お目に出さんは子供
に砂糖子てポンくは其おもえずとも是を物語
の中にて此くの様子に於て申す其からば数多の
外の呉国の村落數て其はいづ子方の向まで季

説のみなれハ條り要ある論ハ言ふまでもなし
莫利宗なとハ今度計中より渡りて実情を告まし
さなり何ぞ名日本の国號を正し海岸の防禦之人
皆国なれハ耳目なきにいたらざるやうにて畢竟外国の様子
を探りすまし一年日眠る居中にても少しも知らぬ事了し
何分僅に一聞ぬの事を論せん上書ハ只さへ正国策
ハ示尽んの外ハ去らぬ事と成れハ容易に許さぬ
請事ぬ様にて無名の軍を起す様な莫利宗等ハ
何と怖るゝ事ならさる事之係今日の時勢右様北論六

出し候ハ大廃に及ふのみならす失敬至極狂言
者も少く其沙汰ある事なれハ若くハ其沙汰ありしれ
ありし物々宮の中にもハ其ハ亭主居士に論せしむる
しむる事に付居士多分の者をハ此是等の所々之
此大の内某様先生の説ハ存する如く実に迷ふ論なる
年し演する居士老人説ハ我等の者ら様な韓非若徐
の論者の様に度大なる法眼同しく此様など何
ぬ容易に許さるゝ様もなく此外ハ井蛙の見なりと云ふの所で日
本より外に大国の様なる事を存ぜず候之こそ

眼ある今日の日本なりとも東西南北延續交易甚盛ハ十倍也
がゆく是迄外国との交易ハ日本同志の交易の大なるに
及て天上より一ト眼に見渡す時ハ世界中を掘り
雖の一国ともいふべし而して日本の餘りを以て亜西亜の不足
を補ひ亜細亜の餘りを以て日本の不足を補ふ如く誠に自然
の道義とも云ふべき事にて事の重きの事にて甚だ
大なる事にて世界の交易も益々盛大に結構なる聖賢
の書を讀み和蘭陀の交易も益々盛んに天文医学の
教を求め日本の金宝を費し是又日本に洋学の萠

漸く物紙等の新を書せしハ日本にて新に海外の人民を
生育を遂る事なれバ博く施す所の兩方を叶ひ何分にも其子
交易なるハ即ち自然の理なるものなれバ古来より有の
往朝にて大凡世界中の外国と交易するハ即ち文明
人の規模の大なるを以てのことにて日本にてハ魯西亜
諸厄利亜杯とも付け何なりとも取り之を欲して敵国を十分に察
於ても更にて其備を為して武威をおしたて何の事也
其上にも古来より事とも莫利宋ハ一方に用ひ是をのばし
甘蔗ものハ交易を行ふべきを以て独りの金銀航海の

前此蒸氣水たけハくみを以て時計に替し阿蘭陀人より送り
只だ日本ハ蒸氣のことを存ら無く為して只義理を
らず此日本人も此を氣此ぞくるれハ風をもって事
出来り然るに於て其他莫利宋が深謀此所において蒸
水をもちひて出来事を欲国とし　清仏儀操ずれ
清名許して給符を以て於て此の内此海岸一清にて仕
日本國中北浦に陥りて是を陥り探らされハ彼の術
中にて度々以て是れ故に出来よりハ家競して交易を許し
其後此外人ハ交易事を蒸氣をもちひて其後其身を

義事を止便し是非ハ彼さへも帰る此方の武威よりて以て
出て何分にも武備を一層加へ無き時節柄なれハ左に通りて
何かし世話もなくして幸ひにも見分けて請厄利亜ハ砲術稽も殊
更巧みと学び出して陸にハまさに日本の法によりても防ぐ
又ハ彼を嫌い無くして大けなる戦を生来になりたれハ彼是なる
しかし交易を許し候事ハ去年に仕来を行ふべし上に分別あるべしと
識天地の是れにもいふべきに世界中我ひとへ春にあらしたちまけ
為る余也候是でも天魔先生の氣にはめしぬるやうなれど此先生
夫ハ大義に似て實ハ天命自然の道理といふ者の我志しぬ編文

そりまなれたるけ論とゝいふべきのみにて言上巧言表現ならとハ
是らも其事にて外国との交易ハ日本国志の交易乃大けるなれ
おやれ外国から諸物薬品の来るハ日本の益ぢやの海外よ
生民のためにを救ふのことまし 理屈を除るハ自実ハポンく
を以ぬりるれのる是人 排仕度大笑をらる 上天公が於げる萬世
界を経営しぬる所理ハ誠に妙と不思議の所と除るるかな
ものにて毫忽も人工を費さずして日本ハ日本だけを一ト
區として滄海を周らし支那ハ支那たけを一區として
沙漠を設け魯西亜諳厄利亜迄も同し節にして至一區
の内各氣候風土人情習俗言語形体も同しきなれに至一區だけ
ばかりに交易融通して一毫も區外へ求めずして何事も足るべし
諸品を一切俵足するやうにて拵夫上公が至一區の内へ萬く
人の人を生し出さる時にハ其萬し人ごとけの衣食住の品々
より病気の類の薬品まで ひとつ乃不自由もなき様に治め
をそし生じしてあるてそのうちに衣食の類だけハ生じして
やるから居宅の料ごけハ外国より買て来ぬの又衣食住の
ないだ薬品と張てやるけまて薬品を点ハ多からど向ぬかし
よそから取て来ずともいふ様に揃きお細工ある上天公ハなき

者なり然るに言語文字を異にせし大海河漢を隔たる数
万里外の国々と交易する者ハ上天竺を始めとして
天地の道に背き人工を用ひたるかしこきといふもの全く西
洋の窮理と唱ふるものハ私意を用ひて智者共至れりと
いふに属するもの多からんの論にも毎猶今日明白なる所より
来る聖賢の書和蘭説しまて天文医薬乃類日本
の書籍とるらし諸形説披を得て一最も其業になし
是故といへども其如何あれどもおしつめて論ずる時ハ天命
自然に陰陽を根として流行して万物出生する是理なり

北天文地理なり於て外国に習ひ傳ふるといふ事なくとも究
理学教を年の久しき古今の間に充る自然と出生の人
起りにて天地に充る究しけの仕業なりて外国ふりて究しけ
し毛に迄し家と外国を治さる人し儒老少極よ印乃
天理論なれども古りし医道今日に書物も十分渡りぬる
ま又天文医薬等の書も大方ゆるけがつて有けハ此ハ学文
至るかも日本人の心掛皆於て学ぶ事ハ其賢の人
物も新なるべし魯西亜諸厄利亜に強く天文医薬並も完けく器の
事にも何事にも何ぞ日本ハ世界最第一の国にてむすびのを望ひ

さて安逸に暮さすして仁に依て人々が放情に流連して視気甚衰
に行なれても夫の諸厄利亜孫祖の事を復仕さすして彼ら當にし
て叛かれ竟情といふ者ありて何にか日本にハ傑出の人物がおきかハ此
度莫利宋に交易を許さぬ中代等にも宜敷なり史人は庶に足らの支
那和蘭陀の交易迄も一切停止して外国より書物抔も絶て来ぬ
るになりたるハ日本の為も不自由なる事が会頭が出来て度外なし昔より
工夫して日本にも遠渡をした人物か祖の人物いつ頃の誌にも外国にまで
ぬれに於て来て遠支那の敗書しや諳厄利亜北亜米利加といふ
されたけれもせぬ程になりてレサノツトが来たのもモリソンが来る
といふさうなるも無程に於て諸の遠航に魯西亜諳厄利亜抔の是非とこ
交易が来りしといふハ今もうを無んの外ハ来ても天命を探るなど意
味合を会頭を為ぬ要国をも為すれも交易を許さぬが宜えぬのには
らぬといふて一向彌らしし数万里外から軍船漕出し鉄砲を打
に来るやうな無謂别その為れハ天心背きたる無名の軍といふもの
にて始皇漢武か窮兵讀武といふ類にて何も怖るに足らぬ事
にもこちら海岸にてボンボンとやるに関にハ打払ふて彼か蕭
墻の内にもボンボンか起る等の其国結の其の在に莫利宋も其で
こ和蘭人の兼ありの印名か弥らハ気かつくにボンボンやら抛るも

あらましくとハおよそ下もこうしや前條なる悪弊なしハ一ヶ所さ
せ海いとも いさ已然年々毎人海岸の港所ハたえる然年之丁度彼さ
蕭墻の内よホン〳〵が影にふると云と同様の年八今日北日本海岸
北ボン〳〵ハ勝手まて足る然るありて言勢ふハいさ出然ることなき
とも極言内家の所ハあつちも蕭墻の内ヶ争まのふて今日のめく
四海中の推遷齊大眠りにおかりてハ昭おさし向ひ不合数など
の利権さへ一切やくみとふ並て天下國中の上と方ふハおかく国
窮しぬひて此日本ふ害作るみ穀ふさへ不自由しして生霊を
饑死さ昔椿然ある然まてハ外寇よ先ふ内寇ヶと思へハ莫利宋

信ハ世法もなきまて海外のホン〳〵とハ内との如くし卄四ろし
却年ハ速も云気ふみさきぬる年々へこしや莫利宋破る所の
志やくを起して呉とあしハ恭順てあろふを以てボン〳〵の覆露
の冥ふ邪しどこぞかる胡遼蕃楊撒山ヶ前世来て数百年以来
の旧弊を一洗して下々迄も恢复なる極ふなつて此日本国中が
ひとえ丸けふなつて誇らしきと云ふ日本ふハいつヶ柱も草菜の習より英
雄豪傑ヶ躍なて縦令支那魯西亜ヶ一時ふ責来りても元来武ふ
勝達たる我邦なれどもでも外国ふ負る事なきハ
手足のよごし 国體蕭墻の内ふへ 青天金石のかく至正至堅り

悔しませハ英利宋に交易を許さぬのミか支那和蘭陀も交易を
も停止して其後ハ外國ハ一寸も海岸に寄付ける事ならず大日
本国ハ清浄の地人の生業なるべし　山人曰却て然けハ其後大変
の事にて先生只日本を我の國のみに考へて全く西洋の海乃
る事を知らぬより起る論なり拂魯西亜諳厄利亜なとの外
国と交易するを禄ても其国の産物にて人民を大切にする事を第一
の功徳とする故に極寒の地方まても始ハ生物もなき無人島とも人民
植付て外国とも諸に交易して来て衣食銭貨を以世界中へ人民を
殖すこと以ふ大仁術なれ今日交易を止めてハ忽ち挙国皆戦ひと

なり固より出来て誠に不仁の甚しきと以ふへきのみにて日本支那の如き
阿齊亜世界内の陰陽家ハ其事なれ今日迄も生神なきハ夫とハ交易せ
ねともすむへきなれとも極寒の北海辺ハ交易して交易のやめ
られぬ事なれハ夫由ハ不彼の其の交易とハ以ふハ今日の日本の商人
夫の利を争ふる様とハ格別のことにて全く天地自然の運を察して
育するの事なれバ彼の國々故にハ交易を以て天下第一の勢
とするなれとも此の中ハ日本支那抔のことを以て此世界中の大損為
ハ出来ることにあらす井上先生抔読ハ只度也先生只日本より外
なき天命自然の道理を知らぬの事なりと以ふおかしき事歟矣

鳥の類も生を育る人為へ人智極のおよびては誠にいはざる夷ともその物数

寄をいふ物そなへたるは万里数十人の居三帝を引つれ出て落雅

用が狭り(?)ぬ遠うかる人の出家の新(?)にて魯西亜諳厄利亜抔は大体の所計

策なるものとは思ひより交易所謂先天而天不違後天而奉天時となる

ぬくる世を衣食の不もなき古化と人物移するなりとは即天に遠

ふといふ物なり北面にも今山人がいふる極寒の地にて生物なき

所に外国から交易してやる程も忽ち挙島皆数に外国があるを

いつてはとんと合點の行ぬ事にて日光もとゞかぬ氷国氷海は古より

人跡絶せりしこそ人は生じて居らるゝ程の古化に至る人の生じせしもの

さればの生物のたつきといふ天理にかなき皆之我身が支地へ行ては乃ん物

此夫は娑して…なりん全く彼が交易を杖て生民の生育が

遂らるぬといふものゆゑ誠ヒとかいふものにて内室の所へ玉寶ん物

知らぬ利慾より帆を懐く食にむまさを欲し寒さを防し

衣に暖なるを好む奢侈より起りしみなるものが交易の聖人の教

といふ事をもしらぬ夷といふ所なり交易の人民のためにて交易して

やら福になりぬといふ大事の益を民我とも物が捨て万里くへ

航海することはおつつと渡乃艦を乞て與ヶ尾生の振舞にて豈営

未来りき地みならんや孝長其の節も忘て数万里外の風

濤中ヲ奔走すといへ人倫おいて学問なきゆへなりしん係是も
又欠かさる魯西亜諳厄利亜の世話まで失張諸の舘をたてふて與ゟ
の数多遣しまいらさし臣等ふてひとの隙しなく叩ぬ可成事を
かの英利宋なるをのおもかけ亦見んふハ去るね悪説て行し奴と思ひ
あれハしても居るその数十年来支那へ由き古聖賢の書とも読
しといふハ第一いやその外も元来不見んふかこれイキリスも土子
迄たとも又本気なしもかしこくもして珍史の中の大夫天計など
やいふ宗城採り南しき年来日本の出館迄て日本国中ふ幾万人乃
條死しやらを好機会柄と考へ付て吾イキリス國柄ハ何よりも

天父地母の生しめし人命を大切ふ致さゞる日本の天照大神支那の堯
舜文武の道となれとも孫ゝ七人の漂流人さへ送りと〆里外濤を
凌き護送する程なりに日本国ハ右数度も深山みるにかりて了うなかりしを
年来数多人の生霊を滅ぼさせしとちらハ何るものや是故ふ吾
イギリス國のことなりしも支那ロシヤ杯を二度も思ひとさん進取の最中□
船を催し兵を加へ英利宋兵を先鋒として来るならしや出来なく
彼ふ致す急度去て了斎の何なりといふその旅ふ是斗ハ何とも
一云の会談の使よふハと云るまいかと思へハ漸り気味かまゐるて
大切の御篇中場ふ笑つさあれて干諸蕃方抹せや西不留もを

まいを氣を悲しけ也たるんても皆肘とちやし莫利宋ヶ来奴
先子晄ヶ召しかし天下國々の上と言ふそ大學の序論明德を明かにして
之しひ朝廷の上ふ關雎麟趾の意ありしめ後て今日の仲間
者のものを持しまて公侯の腹心公侯の干城となりし杖を弱して
を魯西亞諳厄利亞の水城と稱する堅船も打碎くへき仁者天下に
敵なししてよ遂ハ此も何色角も何造兵氏大日本國中ハ万古不
易の國めでとあるへし真ふ實民ちヶハ茶ふ夢堂居士ヶ心も迷とふ
如し天上より萬世界を一ト眼ふ見渡た時ハ一ト握り程の一國とみ
生を一年守方則(ノットリ)て春秋もロシヤもヘンガランモイキリスも救く為れ

なれ共仁政と作き民撫ひて酒宴を楽む三昧も止ふして孝悌の田ふ
耕め是を以夷といひし外國も堯舜の世となさバ誠日本國を
天地開闢の御徒とて萬世界一統の業ともなしも朝廷の上ふ關雎
麟趾の意ありて仲間のものも腹心干城と成候ふするふ
仕方ッ重々大根本ふて一度大学の考察ふなんても天下國家
(上ヾの辺りとの公)公侯ふかりぶりともなり迄も後ふ以るふと芸ひ淡々と上ふも
当世の大名達筋方も此以ひ席ふ蔭出目出度なし下々数へきそい
ちんとそ又しててうんと一ぶ別まる肝心の時も只肘曉風颯々吹来
り葉の者を吹掃り雪さん降こみて大学の考の旅とし候

いと名おかしけれおもふ夢醒て後に夢中の事を思ひめくらせハた
二翁か莚話に此世が夢の世といふ事成たとへて左様成る
作りしおろ也出世此夜竹也髭髯に夢の夢なる夢の世と
夢の字を三つ重ね重ねてこれをしめし夢の世といふ訳
うまむといひしを夜理に夢菴先生か夢の中に夢々山
人と夢をみ如くり此海に夢に物語とせしも誠に夢の世と
いふものゝ誠に其の咄き夢物語を一段始終たしかに覚へ
居いも又夢の不思義なれとも此今宵は寝酒代不と寫し
出す桶ハまま奴兼土の手男を覚し一日如つゝ其此夢物

語書つゞしろハ古き以て手書ぬ一寸暗の夜聞て今宵ハ寝
酒の肴にわけ出ハ史上へ行但の不みて枕出し夢を読も尺出
まいらと不寄る事を気すみを見に夢ならん係寝酒か故にて
まれ夢の入らし出ぬを大きなけ出とも、とかや世夢物語
か孫房如ひの偽詐あまつて麻雀の人序目に入て右枕の言語
我夢をみるといふハ全後人の事か不相應に平生は入る遠違
の事とも亡識先と故の前の蒙にて甚以不庇ゝ音なといふ法
処に来り寝酒のあまく今宵の夢みハ空てもまぬらせなた
おもや大けに夢なるへしされハ此夢物語ハ相手長太息の

路行の邪辟ゟ出たりならバ大学にも礼をも表記して著し
抄語とせて名付く

危言

人の無病なる時ハなんぞ未病を治する事
より世の治平なる時ハなんぞ未乱を治る
により故に人の為に疾病ハ害を禁忌適用
の方をいふものハその人の無病を整ふが為なり
世の為り内患外侮の変と経済取我の方
を説くものハ世の治平を整ふ為なり人を
して無病無変を安んする事を得せしめんハ
刀剣を帯し武藝を習ひ及ひ器薬を被

古今の文ハみないつはりなるへく世をしらく
長久必安を欲せしめハ嫌疑を推く統基
を築き武後を蔑にし旋沫をなすハしむる
朝ハまへてなくまてなくなりまし さらハ世の
長久必安成ぬへきに悔患が侮の身と孫滔
敦哉此方を統かしハなすへきに今史予を愛する
ものハ戒ハ出世に業を亡く戒ハこれに命を絶
しなくその愛なるを損く国を憂するもの
あまく統り故に業を亡く命を絶すのもあけなくハ

子を愛すといへとも須其の悔患が侮を済
ふの方成設けずんハ国を憂ふといへとも
そ出国に興る政なりかたくもふる変なり死人と
病を同しうするものハ必死にし亡国と変成
同しうするものハ必亡ふ国の興らんとするときハ賢
を進むるになり言を容るゝになり国の亡ふるときハ
に佞を用ゆるになり言成拒むになり其賢人の
賢明なる時ハ心に其の形ハなり政ハ言に
なり忠なる成其の言語を壅塞して首も亡り

同しからの三峯ヶ開ひながば決定の前さらに
実なる事なくして命世主信の者といへどもまた
木石に同しかるべし今の世に当りて諸侯の便
此の苟合をなせしは古来の道を捨て潰乱し文武
に勉励し君義に従ふ事する者は古来の道を和とし
悪として当世に称ふだ或は流行に後れたり
などいはるに亡國の兆に称はずや去れば文武に
勉励し君義に従ふ事するものその氣大ひなれ
慷慨豪爽その気大ひなれ義憤激烈或は習俗

拒り速成せるものは彼らが其の苟合粉
飾心の皆に安らざらんや古来の道けふは
かのいはゆる道けふしその然ることのはいはゆる
然するものなれば其れ林子平の海國兵法を著し
たる天下のみなその想ひを兩はざるはなかりし哉
今になりてその想ひなかるべしとしるらるべんぞ
当世に想ひといふ人々の多くは先見の士に
称ふる事をえざらんや去れば当世に想ひといふ者は
於是の後様を恐るると風俗の余後を患ふると

米穀の運輸に乏しきを患ふるとき旱荒饑災
通貨壅荒水利等の策をいふものあり又
外寇の侵掠を慮りその防禦をなすべし又
と思しく来らずんばなく國業後に於て
も疾病なく軋糧を貯へ置くことなきやう
たとしたとへば失策といふべし若果しく
わが國の人民いふはたとへあに渉失をなさんや
へらんや波にかゝりし来り渉らんば海外に
波ふる来を経するといへどもばその度なんば

かゝる波ゝ来渉するときはより渉すんで
海外にあるし危きより近るを殺せる文なく
いかんばはじめより海岸に於てし次は山野に
於てし壊すに於てなんゝありし又は近海岸
に於ても其の猶然見へしく顧ふ事を避けん
或は若しき此擾らく実はなしこにより或は
連夜に鼓噪し風雨に接来してわろを
驚然悸くべし山野に於てせず流落する年に
あるの方法に達すべし壊亂に於てせぞ其の

防禦の道徹(テッテ)せしむべし かくて我邦の砲臺
塀設の壘石堅固ならしむるのみならず
に大砲の一發にあたりて然らハ石壁崩壊して
瓦屋粉碎して更に周邊もけがさゞる隊伍の
檣ハ却て臺所の火矢がりとなるべし 然るに
築きたる砲臺ハ悉皆施設するの標準(メアテ)ならず
なさしむるに急へて橋(ホジミラ)ならしむるに仲るへからん 然り
太平の無事の時にあたりても其の營業たる諸市店に
出して費多かりけるに其度更に何々の時節なるに

さん砲術の變ハ拂郎察の勃(ボ)亜那(ナ)八(パ)盧(ル)的(テ)の一
黨より大に奇法を設けて耳目を一新せし
かど其の書ハ其の志あるものもおほく為まく
ハ西洋の砲術を遺(ノコリ)なく知る人ハ其の志
今く名利の外にあらて國家をおもふ人ならず
ねバ出版御侍なる多くハ財貨に乏しくして
志成ありともその一二を得て以て引札(ヒキフダ)と
して七八を括(カツ)して以て國を衞して
我を守る變を得さる時ハその中の要文數紙

をぬきたりしハさゝか人に後にかくのことくに
その技術ハ称すへしといへともその心よく
歎しむへしさるハかしこきに国家を安ふするの
志なきハその譯しるせる書ともに世に存し盛
なる有志の士族ありしハ古人に傳へし筆
一の変に備ふへきに志あれたにしく書伝張
中に傑出せる生徒わかく囲（カトリ）をとるに於ては
しらしめんそやさるハその人を砲術の淵奥を
窮究してよしや海岸防禦の大任を済る

事なくハあに一人を除く東西南北に奔走
すること更に得へからんや因茲に砲術有用の
書を纂求してこれを通読せしめんことを望
ともからをして帷中に秘しおらんその所心ある
へからす」とも生するなからん時に全国危難をしらく
一藩ひとり存せんや志あるもの忍ふ堪なりたとへハ
わかのみ業を方成なりとく人に傳へさる閉り
息らに病にわからるゝそめしくるゝよく其成
救んとも砲術ゝ世に接受する私に不利なるハ

たゞ実用なるは家なし然るに兵流の
拘泥偏僻なるもの諸流に多く人をおとし
然れとも古くある兵文の外にあらん兵学なるを覚
定むるは我邦にその頭要といふはかなく法兵
家流もなくたゞ習ふる武門要鑑抄兵象録
等なるは為まくよりは文のはんとしわかる
かくて国語にいふへくもはやく附会ならく
八一策を弁き一支文と云なしほんかさる也く
その人のされをいみし兵師なる先生なるその

いふところは皆わかまゝなる説理なりといふのみなる
世にいはゆる西洋の兵法并軍陸戦銃隊
の用法も多く翻訳なりさるとまはいふも道
とれその書御得たる人は出まし読説飲みけれ
むかしはしるくわきひろかくひとゝ人にほらん
に快くきしいさゝか人に物わからつゝその名
実践斎と来る其川人の自らは多く
いふに愛国の志あるもいはらくおこなひ玩物
喪志といふへきなくわゝ人に為めらさん哉ん

の業を国家の緩急に供ふるのみなるさるに国
家多事なる時ハ則中心ありし事なれハ干戈の際に
の間に兵書を抛きさらしおきしに諸ハ誘
諸に溺りんとせハなるまし西洋新来の書も
兵須もいと貴きわざに人に用ひなる成功も
さる事なれども是ハ年々に勝事するかのし
何ごとハいふさるわたる書も作家に本ふさる成
兆ともしりんや淺重之挟窄詭襟の通暗生
に弥持唯面するに[illegible]ちその或ハ有志の士

何ほど兵書成得るとなるもその技練熟せし事
何ごとハさるべくその事ハ其手に錬磨して指
あやまちの多かるべきなるに砲術ハ或ハ兵法陸戦
器械天氣之陰晴に從是その候をはかりや器度
の何るなるに生ずる出也成抛技ある時なれハみんハ
その一端を候ちなるし或ハ一端を踏ハまゝに
に及ひんされハこの技を衆に弟人の日夜り
錬磨せとも技或ハ及ハさる成患ふるなるり
為之也成[illegible]鄙ぬ帥に加二[illegible]みく勝に其の十の

一二を学ぶのミなれバ実業に効の有るへしとも
お国元にかく此迄流法に習熟させしめん
とするに留流をつくるを禁ずるハ無益なるに
禁じ給ふなれバなし て軍艦を造るべき也
なく兵法の操練ハ有るべくしも御国とこと
に陸戦に於て然ハるなれバ世上いなく
の軍馬なりしやこころに硝薬の知ハ人皆これ此
商賈ニ売買なれとも其レ援兵の際に有ル
公務として此様なくのなりんやまた戦陣

の要とする所ハ糧餉にありて一日もなくて有
るまじ然るに其論をさとる所なれバ此
あるべきを今ハ全国の大抵なる諸州
の人民輻湊し耕さん稼ぶすして衣食
するもの亡第に及ぶ世禄の士ハわが
衣食を患ふる事のおきかねるに大も収薮
麦を辨せん黒白を知らん或ハ速を然情
に従事しなく逆に遥織に如るとの有
これ迄援兵の際に有るくまさにいつくに

止宿し何ぞ徒に舎らんや遂にならく
その時にあたりて天下泰平を鈴残なりく
悟然として自安せんや古より他の国を尊
ぶの花自国の人のみなれ宗の言なれ
ばの言なる将帥大かく漢古より人なりて王家
の患内変によりて大なるなし遂に世禄を以
変残任じ朱槻を得て清残せりに洛蜀東
林朋党の禍なく王安石蔡京等の才子に
国政任るの害なきをなほ福禍は糾へる縄

のごとくにて人才を尾碌のごとくし之を疑ひ蟄
塞せる害あるにあらずして讒諂面諛吮癰舐
痔の人のみ上下に満ちくて倜儻英邁の人
なく猿の化するは人を怪し烏の群するは鷹残
逐のおそれきゝたる人のなきもなし有なれどもこれは
粃と見る名律なき道にて乱残吞み囚残
嘔きつゝ遂に僻となり庙尭を思へるこれはゆるへ寧を
かくいふは張元昊が宋に禍し中行説が漢に
寇せしもなかりしなりいよいよせんとせし彼なれて

果して我か採るの意なかりし然れハ志者ハ其
積年之久しきを経るに至其のなき我
必とせんやかしこ道行ハ一人或ハ十人或ハ
五人に行りて爪牙を蔵伏し遂我捕ひ取
を消むるとその成き我必とせんや志ある時ハ消
ん注意して漸に得て志遂我ほうふハ其の
有無要実を悉すまこくん志つふきしてく果
を去て惜我驚かし水に波して失我遂ハ
或ハ其の新繁我得てその形容を失ひ或

或ハ一生を得く一生在我遂しその己に行ふ
ハ道とるかハかしこにとりまとく行ふハ宜しきるハ迄
をかくして後心の病いよいよ深からんかく
のかき時ハ其の間を探らんとして却て之れを
失ひ一生を害を祐らんとして却て志遂我境を
の法なり故に古の良将の間諜を察知すも大
むね従容にありし廉慕躁迫をんいくせハ
いかんぞ之れ我知ることをえんや世の不錯之れ
より甚しきハ無し志遂之か肉合のまさに学ふ

つき給ひて学者のふへきこころなふわきまへの
國にありては其恩沢うくる人のそのほし
を志すなるハ此籍ミてハいはさる事にて諸道に
快しとするもの何ぞんやたゝきこうしくこれ我
いくは於思といへとも道多くこれ我いくは派を存ん
有益なきや又我格してはいはさるなる事に於
何道ミも大度の例ふは一本の文ある給なる
ても今の世に行はるゝ果しく事のいかんなるか
覧人我みなく編纂ふの諸によひとしくして直

云観諫せるも糺反さるをいふんや元禄あるく
ものなまに糺錬叢亂し筆記之道ハ文沢り
それ我昔道ハ胴窮する事に嫁云出従しくその
日荀安我済るのミなるをや今らく抹説於楽
の数度をいふへし法くて陳る事又を得し而穿
陸戦を諫せるも事我なるハ是文我得し遅
糧の法を論するも周下の備を於ふ事文なく
ハ経済の法を論せるも気風の弊を療
せる事文なくハたゞかくのみき時ハ多く云聴れ

討論ハ其石を水ニ投するか如きものにて或ハ
及ふ事又ありといへとも上ニ般閑の名なく
好ニ放言の有なるをや世或ハいふ学者ハ是
無用なりと或ハ指摘迄ても学者皆開なき
者なりんや学者ハ其人ニ投なり用と無用と
其人の材なりけり其材果して有用ならハ
何をなしても有用なるへし其材果して
無用ならハ何をなしても無用なるへしいハ川
ともて学者と不学者とを以て其用と無用とを分きる

へからん実学或ハ一二の学者の実用ニ切ならさる
を見て一ミ余志ある者と定然りん其ハ一二
の学者の隻眼なるハあるへからさる学者ニ余
隻眼なりといふニ関しかるへし志なく
学者改まるニ無用なりといふ古き未詳多
の資質改抹探するその人こゝにいふへくの資
要ニやあるへきこと世の学者の為ニ解説
を為さん民家なり元ハ儒ハ其ニ往て川といふの是
ハ有用なりや無用なりや試さる者とあるへん

たゞ國恩のおへにあるべしとおもへばいとゞ
みづからのおふさたるはいふのみ今さらしく
永く只は銷さ筆は閑さく木石と伍を同
しうし康家と筆をうかゞんのみ陶潜帖を創
寄奴に寫し鄭頭菊畫は胡元に切るとよし
や大臣といふにたらさるともさ逆臣に仍ふさる
へしいふを勝に夜光を投して人をして
剣は振ふし老んや韓非説難を假りて説に
天氏に遺恩ありと旦々りきく白遺こゝろお寝の

十一月にかゝり来らんといふの説を書して
その名は元遺山に擬せりとこ遺一生説云亭
深妙に元遺ら紀とこゝろなからんやあはしておも寇
を患ふるの深い宜しく麻雀のうちにかくし
市井無頼の徒をもうしくその半途をもち閑かし
もんらしに嘆々としく大言さらりのいこれを
言ふるとものかゝらしあらくは耳食嗣ゆしく
炎は楽しからう又口およひによいか夏をいふみ
耳まことは閑ことはいふかのはそのおのの罪に

羅ん事を思ふにハ其事の不義をしり奸心を
挟みたるかくの如き時ハ人まことに知らし人を
知りのハ哲なりあれ智のことなんや当時り
なりといへども其を要なりし賢愚なりハまさに
言を守るし誹謗の木敢諫の鼓古の遂依
なり廉潔に童謡を聞ゆく通言を察に
世の人なく義しと言を守るの道なり言を拒
の道なり多く閲く一字用ひ事を捧げ法とし
然るに政府を立て精粋を撫ふ過失を答め

其事をなく此主をいふなりの罪なく此主を
きくなのなく戒るに足ること言を守るなれ
道なり防に人の言をきく陰に人の才を
忌ミ政府を摘抉し過失を咎責しく
多くに賢の名を売り偏にて耳に聞しき
との言を守ること言を拒むの作なり家扉
致妻とみハ人の常情貞を施みハ世れ
通習なり今もし一生言を閲んとしてその
言を拒むの道を以てせざること様を以て物

たとふるに語りはへるものはらんやてくの要き
時ハまさに木石鹿象を同しうし　而る支文
あらくけしからく外寇の變情形勢及ひ防禦
駁戎の策救荒弭災通貨墾荒求利の法
何るも語り狂愚の名を得るを楽んて卒然
しるしく言ひ出ぬるものならんや

天保七丙申年八月十日

寓情問答

人みな魯西亜が其國の米酒及ひ其外の産物を欲して日本と
於いて交易をなさんと欲すといふハ實に愚なる事なり　其故ハ國人の産物にも學
また他にまさる様々の品の脯並ひ海ほか葡萄酒等を用ひ
事なきゆへ敢て日本の米を欲する事なし　また他の産物の
欲しからざれども今銅銭硝硫または紙等の類ならは其らを
皆其国にて產する所あらずしてハこれらの貨物をもとむる
事なし　其ほかハ其の近傍なる蘇亦齊　嗹馬尔加　諳
厄利亜　和蘭　拂朗察　入爾馬泥亜　都兒格　百兒西亜　支那

等にも交易しては有べき事なれど蝦夷僻遠の地を論ずれば土産を
日本に送るともいかんや かつ刀剣は利器なれば我が方より
交易を許す事なかるべく 紙は良好なれども銅板とする
事あらず所以は彼より交易を求むるといへば みな虚説にして
もしくは真に日本の物を求むるとならば何しておらず我筆にも妄
に有べし ましてども波羅泥亜を置きければ諸物多き国
に世なるべけれ ましてや 土産を見せず 南方亜米の諸
国をもとめ 或は伯西児等にもとむべきを なさん その上白里数
千里不毛の地を隔てたる日本に求むべけんや 古より無益の事

なきまま彼ましく日本をとらんとするにや 国は古来創建の
定なければ其右に欧羅巴あり 其の北に亜墨利加あり 其の人智勝あり
ていましや一二国を併呑のみならず 彼等従ならば全国みな其のめぐ
るは頑なる所なれども 北は界は海を以て限りとし 国に有ざれば
まん 防禦の係の所にして失なきにても日本の所は好係の
力あれば四方を守るの才あり てもなき事の新一危城をもつて四邊
を備へて四方に有なるは何の人才あれば何事をも
恐るべからざる事 日本の周国は大なる陸離せしは暗礁の
多ければ其の上を渡らんには大船を用ひざる事あるべからず

小船に乗れハ大砲を用ゆる事あるべき奇しく上陸
をなしかたき小船の数艘に大艦の兵を浮べよりハ乏しけれハ
餘に小艦の事なれば旁にて接戦を為さんには何れの事
もあるべきなれど大隊を以て上陸をしかたし日本の如き四圍
多くして馬軍の進退に不便なれバ大隊を用ゆる事あるべからず
去りとて日本を侵さんとて兵船を東海に出さんには彼れ許多
の軍用を費すべくして本国に不利の因を生じます全國を擧
げんとて幾十の年月を費さんには防禦の備に精錬節の力多く
が有る國としけれ 蘇亦齊等の國々より望む其の後を窺ふ者

奪はせんや支那等の屬島の甚だ近き事の急を発せん
や自国のための一隊を出する者なきを發せんや故に海軍
に於ては諸侯列藩及び藩故に其の備を立てさせて大東南
海に船を泛べおきてまづ日本は舟運の要港あつて在りて
櫓に楼をもて要害の佳境なれば纔に一二の都府を焼くに過ぎずして悉
く之に近寄らず日本の民ハ義に勇むの国なれば小民と云へども
敢て彼に服する者なかるべしたとへ全國を擧して何
人数を要すとも如何にして得べきやしかるべき多人
数をおかんとも其の間度等に至るまでを本國より得べからず

なにがし兼好法師がいへるハ何事もなにかに
何がかはりハ治安に治を乱すが故なれ敢て乱を乱すの言に
あらずまた治清に備の要をいふを治世に乱を乱すのおそれあるが故なれハ
長崎浦賀等に防禦備をなすに乱を乱すにいたるべくまた
王侯の若殊に居て士人の刀剣を帯し及武術を修行するも皆治世
に乱を乱するの本としていふべからずや去れば治世に同じかたはらの乱の基
いふ目前の難なき所をかくもおもひはかりて治清に備の要を
いふ事をさとりて未来迄五世の政をするにあたりては日本一国のみ
ならんや五大州を全世界に一統するなどかの「

ずさハあるまじくましや人数をあつめさせ候て国民
の乱を起す事別してなきたぐひハいかばかりか相続すべまじ
予し既にホーシトフガコトロフ地方を劫掠せし人ハ魯西亜の臣
吾なつてますます波羅泥亜人のあるをひそかにはなしれ軍切ハ・
ありて既に異人を御しれ蓮を来利葛子借せしむ事地ハ
北亜墨利加の近辺なりかつ其土を旧在を侵さん者ハいひかぎる
べからしあらんや况んや世の人のかまこまをいひさだめらるべきから
むるる近年ます急びとなき乾坤の総体悛しての此等する
事ならぬを見ていふ治世を乱さる事やいかなるやいかなることそ」

テル帝がこの業をおこせしより東北白里數千里の地を奪ひ南せり
セン等を略し亞蘇乎齊を侵し今終に波羅泥亞を奪ひ其 亞蘇乎齊
入爾馬泥亞都兒格百兒西亞文那の境を接し東は山亞
褒利加カウルヤまでに至りて すでに海内の大半に及び萬國
の國々を覆滅する昔に比すれば又天下海内
の大半を占め敢て其の他を欲せず若あらんやかの伊多
孫亞帝が其の國を富強にせんとて海舶を池中海に出し。
其の一半は南方に向ひ都兒格意太里亞伊斯把你亞波爾
杜瓦爾等にもやすく舟舶を出さんとて其の要地を亞蘇夫

（トン河の黒海に入る所にまたがる壤地なるを）を奪ひてここに兵を集めてカフハ（里海に臨める壤地なるを）
をも奪はんとせしも黒海をへだてて那多里亞（亞細亞都兒格の地）の都府
なるシヨルシヤとタラベサント迄も都兒格の都なる公斯當
丁諾波兒を窺ひしとなせしも遂に兵を背して亞蘇夫を
奪ひしかなかりしまで千七百十一年（正徳元辛卯年）の布略突河（ブリユット）の傍
の會盟にてこれを都兒格にかへしぬる計の也む時なくして
千七百三十六年（元文元丙辰年）に兵を起して海陸より攻め戰ひ
軍四十二万にして再びこれを奪へまた彼これをその四年の要地
なる加ふに兵革の患の除けに止まりしを計てて千七百

三十九年（元文四己未年）に至り其地を加へし共に和議をなし定めて

この策は既に廃れぬ

東海に発し欧羅巴の西海と小海と地中海とに湧出るなる所あり（西海の流る蘇亦斉と賀那馬尔加の間を過てその二国の東にいたるを東海といふ ありさまこの二国をも共に西海と東海の間にある）魯西亜よりは猶西の海を東海といふはそのあたりよりの称なるへし

いましめは莫斯哥烏の府より魯西亜尓字尼尓（魯西亜の小峡なる杜宗亭の地とて白海臨めり）ここより出船して直よりは蘇亦斉諸尓勿大亜の小峡を廻て至る事なきその道甚遠くして寒威に沾ふし殊に諸尓勿文亜の様斯哥烏に停まる大渦ありて舟の妨け加ふものあるを海は塩気すくなくして舟は深くやはり至らせ

氷山に遭ふ事あり舟の最難なるし其他伯多禄帝は蘇亦斉を破てインケルマンランドを略してそこにペートルビユルグの新都を立しより直にそこより出船して賀那馬尔加蘇亦斉諸勿文亜の海峡を過て和蘭諳厄利亜排門察等に到る事を得る加ふ其の便利は更に古に比すへくもあらすなれにしあり

北高海に通せんとの三策を立たりしか

其は上にいひたる亜蘇夫をとらんとせるの為なりそはそこより軍器兵糧を送らんには直にここを過てカラルカ河に積下し

支那より十二里の陸地を運送してそれより支那をトン河に泛へて亜蘇夫の陣営に至らんには数月を経る事なれは前後一年の工夫を費すかわりにかくてそれはてしとウヲルカ河をカミシカ河（小河のトン河に流れ入るもの）に因り通してトン河に入る一其二の舟路を開けりかくしてトン河を亜蘇夫の近傍なる墨阿的湖（メヲテヒ）（欧羅巴亜細亜両洲の界に在り）に入りそれに沿ひてカフハ海門に至り黒海に達し海に到りしめかつカフハ海門に官舎を築きてそこを出入する都児格小韃靼人の税を収むへしと計りしてその計は前にたる運をその河道の築しまたれ加山まで

船材の櫸を取る等にその便利いははなはたなくなきに

（注　さるはペートルグの意はたゝ櫸楢の木のみにて船材の大切なるゆゑその後に櫸を植しめたり）

下の二策を共に策る事を得さらしめは初の策は終に空ふさりし

支那皆自國の便利を過きるのことをあらす其咽喉を断ちて各國合従の便を妨け坐して天下を服せんと云ふにあり而してその海内の三大國と称するは魯西亜と都児格と支那をいふなるをその都児格支那を隔つるになる不百児西亜等にもて一般の効を奏しかしかることよりも魯西亜は不地にして産物に乏しくしてこれ産せるものことは偽りはそこの人を養ふにあつへきかくのをみ

自國の用をなすとあらハ猶近郷の輸送を待ハなきハその最重
延するときハ以而も該地あるとをの為にむらおそれ争ひ如くきなる
ハ猶運糧の不便なるによりおもむきたる波羅尼亜を救ふことに目をおき
たる大軍を以てせしむるハその波羅泥亜にハこふへくしてあらさ
さる大國の都児格を伐ちしに伯爾禄帝と戦ひ十と其兵八
千を率ひ以て底国模尔太皮（此二洲別尓件と波羅泥亜に境せる国なり）に糧をなししてをまつ
さへ猶する事あらハすして遂に厚節を以て騎て国に帰る事となれ
得さりきせるハ都児格兵を連ねて前後不難艱のあるかにに運
糧を妨くる便あるハ奢西亜の志を隔てるに限りて殊に国中の穀

も葡萄ル桑もその産あるによりて大抵ハ南海の地に在りて南方
むきて地を多くハ田圃牧野とすつて戦場となすへき形勢にて
此国の糧を費し将来の穀を妨くるなれハ猶知識を為さしむる
事を得さるハ此殊の儀によなむある道理かして土形を厚く
とするも其尤百児西亜莫臥児に路を借ん事のなすかふさま道理
猶国伯情に追ミ或ハイルエアハカより汝漢に及んて其穀少き乃
地にして糧に籍る事の頼なきかに志を帰事も緩くまた北亜
墨利加を自主と謂尼利亜領との右るハその不陸酒窟の地を
抵わんに上食を得とあらの事をしして多くの人をあらくに便たらさと

るかふにその便を得らるゝ事ゝ直に志を得へきなきゝ故にこゝて糧を
日本に求めん事を欲せさる事能はさるかにホーシトウかエト
ロウを乱妨せしも米酒を奪ひ高田屋嘉兵衛は米穀を積こ之を以て過
たとへ米ゝその国の人の需に応ふすしも止白星と東刺葛人を贈すに
定くさらんやまさ日本を標とせハ手に従て南海の諸島を計るへし
かつ交易の道を彼此互に易にありて自国の有無に拘るにあらす
彼に従て此に往く近しくて速かなるを便とす豈許多の糧食薪水
を費して僅々として本国に往来せんや交易の一国と
一物をもって算計を為すとのみあらす彼か多きとあらめとのを

買て其産をもまてあるに貴重その価をましそこの有餘の物に
至りて更に其産を他方に貿易する再三の折ま加へしを以てその
利を倍蓰するとの事ゝ其産を左手を取て右手に売るのさ如
なるをいかんそ本国のまたとあらのことを買て其価を本国に運
るとのあらんや支那に諳厄利亜ゝ茶を支那に売るゝ猶日本
の交易を請ふは其産のあまてその海路に在て近を以て薪水物貨ゝ
を費すの多少をはかる事なとけれる程まて唯へて西洋諸国の
船の日本に来らんにまてその停泊するところの多きなきにすなハちろ
彼ゝ富を為なすましてハいかんそこ弊弊を生せる田なきらんや迄志か

北亜墨利加をも撃くにまて其種をとるへきとおもふ日本よりも使有るは
無き故に諸尼利亜ハ海よりも大邑を得たれは今も魯西亜薩よりこ
ことをとかんと思ふへきか必然の勢なれハとてへその形のおもむきすれ
其の備をくてハあるへからす迄志か日本の堅固なるよしハけにさる
事なれと鉄関の険を頼ミ洞庭の深きを恃むハ根を深くし帯を
固くするの本にあらさるか如くに誠ハ守備に守備を重ねての上にての
険深きとも初て頼むへき事にて士民の義を勇めるも実に志を操り
民心を収めん後に始て頼むへき事なれは同しく君たるきみ
おもふ如くにあらし必ず始めてこそ御代の千代萬代までも始めて

ところおいしかれと思ひはへるを古ハ同合のまさに写しつきてある
よしにて此ふちはへるは事なれとうきよにも末世の事なれと
杞人の憂の中にも事なきをすさひになむといひ人々ハ聞くへくも皆
笑ひてすつて木石の如くなるへし

海防論

海防ハ海国の要務にして彼山国の関隘の如し関隘なきときハ山険危く海防なきときハ島府傾く此ハ三尺の童子もよく諳て知れる事にして聰明叡智の士をまつて而後にはじめて知るの事に有らず蓋日本ハ一大洲にしていはゆる海国と称すべきなれハ海防ハもつとも要務なるべき事国初の制に於てこの所を急にせざるハ何の時欧羅巴諸国の君長おのおの相残ひ相奪ふのときにして遠大の策の立ざるによ波尓杜瓦尓等の外ハ敢て国外に地を拓く事を勤めずして外患の無きによるなりこれその時に在てハ宜く然るべし当時にて

其にてハくはしく虚實を計りてひたすら深謀遠慮して虎視耽々とし
意ありさるへからず蓋國初のいまだ外患を萌さゞるや其の目の如
し裸體にても居るべし當時は已に外患我に萌せしや冬の日の如し
燠居せずんハあるへからず天のいまだ陰雨せざるに當て牖戸を綢
繆すべし既に雨ふりてハ何をもつて防がん これ海防乃
事務の古今に異なる所以なり 大むね人の言に歐羅巴人
ハたゞ水戰のミに長じて陸戰に短なりといへり これいはゆる井蛙の
見にして彼を知らざるものなり 歐羅巴洲ハ三面海に界せ
どもその國郡ハ大かた土地接して相連なり其の境を爭ひ地を拓く

に豈ただ水戰のミならんや其も陸戰を用ゆるの久しき故に妙巧な
らざる事あらんやたゞ日本の人に勇にまさるに其の長短いかんといふを
考ふされども兵ともに各長短の有るなれバいかん我彼の必敗を
期し彼の死命を制すべけんや 其の海防の第一とするにハ銃
臺なり こて我以て西洋諸國皆武道を備へざる者なし 朝鮮も
外戚の好ありしを以て支那にもその銃臺を作り改めたりこれ
海防の要具なるからなり されども銃臺をおくるのその法の
如くならずんバたゞに財貨を費すのみにて事に益なくしてその上
晒を外國にとるに足ざりこれその銃臺を備へ銃車を扱く

事の法此如くなりては何を為がし其の故なり」是ハあ止と海
防あるに其の銃臺を備へ置きて事足れりとする者あらんや
今に力を挙れバ誰か天下に須ず出さん海岸に銃をおかバ誰か来
て船を焼べし是こ銃臺ほ要害にあくもその打かさるハ所まる
防かずんバ何を為かしたまハ其のなき處といへども是も風雨の
害も有るべきをもしらハそこ迄銃をおくとのことにて有へけんやさ迄
ところハ容易の論にあらじ銃臺を作て改むるも事なくんバ世に
うやすからぬことさなる是れハその許多の海防の策を為さん
事ハ必ずべくもあらぬ勢なりとて是よ関がへきのさる事な
事と知つべき時ありてせんすべきあるべしかくさいハ陰雨せさるに先
だつて牖戸を綢繆するの策をまうけまじと何へ為がし故
なり